

## 経済学博士号を取得しての心境と論文の概要

前 社会科学研究所

ランジット ネルソン ウィタナゲ  
Ranjith Nelson Widanage

このたび『日本とスリランカの経済発展における実業家の役割—五代友厚とスリランカのエリートとの比較研究—』というテーマで経済学博士号をいただきました。初めに、このテーマを選んだ理由を簡単に述べさせていただきます。



今日の日本の経済発展は、今までに例を見ないような発展ぶりとして受け取られていますが、その発展のベースとなったのは明治維新と第二次世界大戦後の経済復興という二つの大きな柱なのです。さて、日本の近代化における明治維新の果たした役割の重要性については様々な議論がありますが、私は明治維新の果たした役割は極めて大きいと思います。よって今日の発展を研究するためには、その基盤となった幕末から明治初期の経済発展の過程を具体的に調べてみる必要があります。日本の近代化においては、明治政府とともに民間の指導者達の果たした役割が非常に大きい位置を占めます。政府の指導者としては大久保利通、大隈重信、松方正義等がおり、一方民間では、とりわけ渋沢栄一、福沢諭吉、五代友厚等の指導者達の果たした役割が実に

重要です。スリランカのエリート達は、常に政府と密着して活動を続けていました。ある時は政府役人となったり、退官後は実業家になったりしていたのです。このうち、スリランカのリーダー達が歩んだ道に比較的多くの共通点を見出すことができたのが、明治初期の日本のリーダー達の中では五代友厚だったのです。

五代友厚は、天保6年(1836)薩摩国鹿児島郡城ヶ谷で直左衛門秀堯の次男として生まれ、藩役人として活躍し、また若い時期にヨーロッパに密航までして渡り、外から日本を眺め、日本の在るべき将来の姿を想像し、意見書建言書等を政府に提出しました。のち明治政府役人として、重要な役割を担った人物です。政府を退官後は民間において、実業家として数多くの事業を起こし、日本を資本主義へと導く指導的役割を果たした人々の中の第一人者の一人です。とりわけ大阪商工会議所(明治11年創立、当時は商法会議所)の初代会頭を務めた人物です。残念ながら、五代は私が15年前に全国的に行ったアンケート調査の結果、日本では比較的その知名度は低いようです。

さて、異なった先進国同志の比較でさえ困難をきわめるのに、先進国と発展途上国との比較となると、経済発展の過程を分析し比較することは、なおさら難しいといえます。経済的にみて、日本とスリランカの経済状態で類似点を持った時期というのは、全くなかったといっても過言ではありません。地理的に見た場合にいえることは、単に二つの国が同じ大陸に属するという点だけなのです。歴史的にも政治的にもこの二つの国が経験して

きた過程は全く異なっています。私がなによりも強調したかったのは、日本の場合には自力で植民地にならないよう懸命に努力した点です。一方、スリランカの場合は16世紀の初期から20世紀半ば（1505～1948）までポルトガル、オランダ、イギリスの植民地になっていたことが、国の経済発展に多大な影響を及ぼしていたことは、事実です。よって植民地経験のある国とない国との比較は、ことさら困難であることは明白です。

さらに、五代が活躍していた19世紀半ばと今日の時代とでは内容的にみても世界全体が変化しているので、比較は一段と難しさを加えます。ただ、比較のベースとして方法的にみた場合、この研究の基本となっているのは日本の近代化過程の基盤となった社会的・経済的・政治的状況が、後の日本の経済発展にどれだけ影響を及ぼしたかということです。そのような状況をスリランカの経済発展のスタートの段階と比較することが、この研究の主たる目的なのです。日本の場合は、そのイニシャルステージの特徴や条件のお陰で、明治維新後20～30年の間にかなり高いレベルの経済発展をしていけるように、レールを敷くことが出来たのに対し、スリランカは日本よりもずっと以前から経済発展に必要な条件を準備していたにもかかわらず、いまだレールに乗せることができなかったのも両国の歴史的状況の違いによるところなのです。この両国の経済発展の過程の違いを具体的に述べますと、スリランカの場合は早くも1830年代に商工会議所銀行等が創立され、また1840年代には鉄道設立計画がたてられ、更に民主主義的な政治的政党が次々に取り入れられたりと、表面では先進国のスタートをいち早くも切ったかのごとく見えました。一方、日本においては上記のような事柄が誕生したのは明治時代に入ってからのことでした。

そこで、この比較研究の場合の視点として、政治的自由がある場合にその国の指導者達が自分自身で自国の発展のためにいかに活躍することができたか、あるいはその自由が奪わ

れた場合、どれだけ自分の活躍範囲が限られるかを探ってみることに焦点をあててみました。五代友厚は、明治新政府の方針であった富国強兵や殖産興業等の発展策を民間の立場で、しかも自力で実現することに非常に努力した指導者達の中の一人でした。今日、両国の経済発展をみるにつけ両国の隔たりを感じるのは、当時の政府の役割や実業家達の活動の相違によるものと思われます。さて、この研究の主な目的は各々の国の実業家の発生に大きな役割を与えたその時代の特徴や出来事、条件の違いの重要性を分析してみることにありました。



さて、最後にこの研究は母国スリランカのために、どのような意義を持つのかを簡単に述べておきたいと思います。過去において、日本とスリランカの間では、今まで互いの国の経済発展を具体的に研究されたことはありませんでした。この研究によって日本の経済発展をスリランカに紹介し、また日本ではほとんど知られていないスリランカの19世紀の初めから今日までの経済状態を紹介することがある程度できたと思います。日本の近代化過程において重要な役割を果たした明治初期の実業家のような活発で意欲的なリーダー達が今後ますますスリランカで登場するような状況作りに、わずかでも貢献できれば幸いに思います。

終わりに、この研究を長い年月をかけて続けることができましたのも、多くの方々のご指導やご協力があったのおかげと心から感謝

いたします。まず、経済学部の高橋 衛先生をはじめとする他の先生方や法学部の先生方に厚くお礼申し上げます。また、教務課、庶務課、本部の事務関係の皆様のご協力に対して深く感謝いたします。その他図書館や資料

室等の皆様にも大へんお世話になりました。広島大学経済学部経済学博士第一号として取得できましたのは皆様のおかげです。心から厚くお礼申し上げます。

## 部局ニュース

### 法学部

ハワイ大学ロースクールのジョン E. ピックロン (John E. Pickron) 氏が、比較法担当の専任教官として、平成2年10月まで法学部



に在籍されます。ピックロン氏は、法律学のほかに図書館学も専門領域にもち、ハワイ大学では法律図書館長も兼任されていました。

### 訂正

21期5号 (No.276) の「留学生の眼」18頁にて留学生の国名に誤りがありましたのでお詫びして訂正いたします。

許 敏 中華民国 → 中国